

世の中の課題と向き合う社会科授業づくり

～「情報はコロナから人を助ける？助けない？」の実践を通して～

高山 翔平

はじめに

学習指導要領の社会科の目標として、「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」と明記されている。

学習指導要領に明記されている「必要な公民的資質の基礎」を養うためには、社会的な見方や考え方を培いながら積み重ねる「社会との関わりを意識した課題解決的な学習」を通して実現されると考えられる。では、「社会との関わりを意識した課題解決的な学習」とはどのようなものなのか。社会科で培うべき力、社会科を学ぶ楽しさについて、本実践を通して考えてみたい。

社会科を学ぶ楽しさとは

年度当初、本学級の社会科が嫌いと言っていたある児童に、「なんで社会科の勉強が嫌いなのか？」と聞いてみた。すると、「たくさんの用語を暗記することが苦手だから」という答えが返ってきた。社会科の苦手、または嫌いと言う児童は、このように答えることが多いように思える。このように児童が答える要因として、教師自身が社会を「暗記科目」として捉え、授業をしていることが考えられる。実際に、「社会科はどのように教えたらいかが分からない」と言う教員の声をよく耳にする。

では、必要な用語を暗記し、それを間違いなく答えられることが、「社会科の楽しさ」なのだろうか。筆者は、ただ暗記した用語を答えられることが社会科の持つ本当の楽しさではなく、獲得した知識・技

能を基に、今世の中が抱えている問題を自分なりに考察して答えを出したり、理想の未来を実現していくためにどんなことが必要か根拠を持って予測したりすることが社会科の持つ本当の楽しさであると考え。児童が社会科の持つ本当の楽しさを感じるには、

- ① 単元で培う知識・技能と世の中の課題を結びつけ、児童にとって学習を「自分事」にすること
- ② 「自分事」として捉えることができた課題を解決していくために、思考を整理し、根拠を持って自分なりの答えを導き出せるようにすること

この2つが実現することによって、児童が社会科の本当の楽しさを味わうことが出来ると同時に、「社会との関わりを意識した課題解決的な学習」を体験できたと言える。筆者は考える。

単元を計画するにあたって

本単元は、わたしたちの暮らしを支える産業に情報通信技術がどのように活用されているかについて考える単元である。

近年情報通信技術は発達し、さまざまな場面で情報通信技術が活用されている。情報通信技術が暮らしの中で活用されていることはなんとなく感じられるものの、具体的にどのように活用されているか、そのことによってわたしたちの暮らしや産業にどのような変化が起こったかなど、情報の本質の部分はなかなか捉えにくい。そのため、児童にとって学習内容がより身近で、より自分事として捉えられるよう「世の中で注目され、かつ自分たちの生活にも必要になってくるであろう」学習を単元に組み込む

必要があると考えた。

そこで、単元を中心に据えたのが、コロナ禍における情報産業の在り方である。本時の学習では、「コロナウイルス接触（追跡）確認アプリ」を取り上げている。新型コロナウイルス感染者や接触者を確認・追跡することが「コロナウイルス接触（追跡）確認アプリ」によって可能となった。この「コロナウイルス接触（追跡）確認アプリ」により、感染拡大対策ができる一方で、諸外国のような「デジタル監視」といった状態にもなりうる危険性もある。現在進行形で起こっている事象だからこそ、学習で得た知識が世の中の課題とつながり、自分事として捉え、「問い」を持ったり、「問いに対する自分の納得解」を導き出したりしようとする姿が見られるのではないかと考える。

また、思考ツールの活用や、板書上での視覚化、ICT を用いた根拠の提示などの手立てを年間通じて講じてきた。それぞれの思考を明確な形で整理することで、児童は自分の考えの変容や深まりを感じることができ、根拠を持って自分なりの答えを導き出すことができるのではないかと考える。

一年間通じて、児童とともに単元目標や学習課題、学習の進め方を対話の中でともに作り上げてきた。思考ツールなどの手立てにおいても、学習に応じて様々な手法を取り入れてきた。第5時の学習においても、今までの学習の積み重ねを意識し、手立てを学習計画に組み込むことで、「主体的で対話的な深い学び」に向かう児童の姿を期待したい。

○単元計画

- 1 暮らしを支える産業での情報の生かし方について話し合い、学習課題をつくる。
- 2 情報をどのように活用して販売の仕事をしているか調べる。
- 3 販売の仕事では情報をどのように活用して商品を運んでいるか調べる。

- 4 販売の仕事では情報通信技術を活用し、どのようにサービスを広げているか調べる。
- 5 今までの学習を基に、コロナ禍における情報通信技術を活用したサービスの在り方について考える。
- 6 これからに活かしたいことを交流する。

実践報告「情報とわたしたちの生活との関わり」の実践を通して

①児童の言葉から学習課題を ～第1時より～

授業の初めに、「自分たちの暮らしを支えている産業で情報は生かされている？」と聞いてみた。すると、「絶対いろいろな産業で生かされている。」と多くの児童が答えた。そこで、「具体的に言うと、どんな仕事でどのような活用方法をしているの？」と聞くと、「〇〇の仕事では△△のような使い方をしていると思うけど、はっきりは分からない。」や、「きっと知らない情報の活用の仕方もしているはずだ。」などの声が聞こえてきた。さらに、「どんな風に学習を進めていきたい？」と問うと、児童から様々な「疑問」や「自分の中でははっきりと分かっていること」が出てきた。

話を進めていく中で、「じぶんたちの暮らしを支える産業でどのように情報が使われているか自分たちで調べてみながら、はっきり答えられるようにしたい。それが自分たちの生活をどう影響を与えているかもはっきりさせたい。」という単元の目標が完成した。自分たちの知識でははっきりと答えることができない「分かったつもり」を認識することで、主体的にこれからどのように学習を進めていきたいか自分たちで決定させていった。

その後、第4時まで販売の仕事での情報活用の工夫について考えるだけでなく、それ以外の仕事（バスの運転手、医者などさまざまな職種が出た）での情報活用の工夫についても調べるなど、探求してい

く幅が広がっていった。

①コロナ禍の対策と情報活用を関連付ける

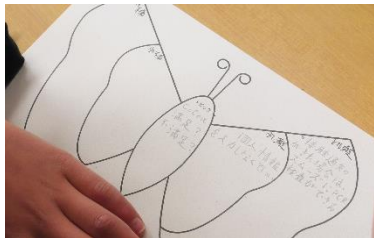
～第5時より～

コロナ禍における情報活用の方法とその在り方について考える授業を行った。児童は11月の文化発表会において、「コロナ禍における生活様式の変化」について調べ学習の発表を行っている。その中で、感染拡大防止の一つの対策として、「接触感染アプリ」を取り上げている児童も多くいた。改めて情報の単元で取り上げることで、今まで着目していた接触確認アプリの感染拡大防止に有効な面だけでなく、情報活用していく上での危険な側面についても見られるようにし、多面的にこのテーマについて考えることを狙いとした。

事前に調べ学習を課題で出していたので、日本の接触確認アプリ(COCOA)の機能面について確認した後、「日本の接触確認アプリ(COCOA)は、完璧なアプリですか?」と問うてみた。すると、「感染拡大防止に有効な面はあるけど、海外にもいろいろなアプリがあるから、ベストなアプリかと言われるとそうではない。」という声が返ってきた。こうして、本時の学習の課題が「日本の接触確認アプリ(COCOA)は海外のアプリと比べて良いアプリなのだろうか。」という問いが完成した。

児童全員で立てた問いに対して、自分はどう思うか考えていくにあたって、バタフライチャートという思考ツール

を活用した。テーマに対して多面的に考えることができるこの思考



ツールを活用することで、様々な面から課題を捉えた上で、自分はアプリについてどんな考えを持って

いるのか明確にすることを狙いとした。今まで調べ学習をした情報を見返しながら、チャート図に書いていくなど、多面的

に考えようとする姿が多く見られた。自力解決の時間、このように考えた後、黒板に自分の名前の書いたマグネットを張ることで、立場を可視化した。このマグネットについては、授業がある程度進むと、貼り直しに来させる。このように、授業が進むごとに、自分の考えがどのように変容や深まり



があった自覚できるようにすることを狙いとしている。

全体交流では、自分の考えを積極的に伝えようとする姿が見られた。多面的に考えることができる教材の特性から、



「このような見方もできるのではないかと、様々な角度から課題を考えることができた。全体交流の中で、特に議論の中心となっていたのが、個人情報

が守られているかという面と、感染拡大予防にどの程度効果があるかという面である。韓国の追跡アプリなどについての事例なども取り上げて説明する児童も出てきて、この2つの面を成立させる難しさに直面した。「自分ならどちらを優先させるべきだ

と思う?」と問うと、何を第一優先にして情報を活用すべきか意見が分かれた。名前のマグネットについても、途中貼り直しに来る時間を設けたが、始め



「自分ならどちらを優先させるべきだと思う?」と問うと、何を第一優先にして情報を活用すべきか意見が分かれた。名前のマグネットについても、途中貼り直しに来る時間を設けたが、始め

に貼っていたところから大きく移動する児童も見られるなど、学習の中での葛藤が見られた。

授業の終末に、「学習課題の答えは出ましたか？」と問うと、「答えは出ないけど、大事なのはアプリではなくて、アプリを使う人がそのアプリのことをしっかりと理解した上で、有効に、正しく使うことが大事だってことは分かりました。」という答えが返ってきた。まだ答えがない世の中の課題を自分事として捉えた上で向き合い、自分なりの結論を出すことができた。

おわりに

個人情報を守られているかという面と、感染拡大予防にどの程度効果があるかという面の両立を目指したアプリの開発も進められているが、システムの不具合なども有り、未だ完全に解決されているとは言えないのが現状である。接触確認アプリが、感染防止対策において本当に有効な手立てかどうかの検証の答えもまだ出ていない。まだ答えがない世の中の課題と向き合うことは、非常に難しい。しかし、未来を切り拓いていくためにこのような課題と向き合うことは、「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公的資質の基礎を養う」という学習指導要領の目標に繋がって

くのではないかと考える。また、これこそが社会科を学習する意義であり、醍醐味であると筆者は考える。

先に述べた、単元で培う知識・技能と世の中の課題を結びつけ、児童にとって学習を「自分事」にすることについては、児童の学習に向かう姿を見てみると、概ね達成できたように思う。一方で、「自分事」として捉えることができた課題を解決していくために、思考を整理し、根拠を持って自分なりの答えを導き出せるようにすることについては、根拠となる資料が十分とは言えず、まだ答えがない課題のため結論自体が変わってくる可能性もあるので、今後の検証が必要であると考えます。

今回の課題となった接触確認アプリについて、引き続き調べ、答えを追い求めていく姿を期待したい。また、今回の課題以外の世の中の事象についても、自分なりに見識を深め、根拠を持って考え続ける児童に育てていくよう、今後も児童とともに授業を作り上げていきたい。

第5時 板書

